第３章　第８次調査の記録
（長井記念ホール・薬学部実験研究棟建設予定地の試掘調査）

第１節　調査の経過と概要

１　調査にいたる経緯

（1）　長井記念ホール建設予定地

1989 年（平成元年）には薬学部校舎の北側に当たる国道 192 号線沿いの場所に長井記念ホールが建設されることになった。本地点は文化財保護法上周知の遺跡として取り扱われる「徳島市庄遺跡」の一角を占める。そのため建設工事に先立つ埋蔵文化財の取り扱いが問題となったが、本学の基本姿勢を確立すべき時期にきているとの認識が関係者間に周知されたこともあり、全学的な議論が求められた。本件については大学の責任において対処する方向で検討が進められた結果、長井記念ホール建設予定地発掘調査委員会を薬学部に設け、建設予定地を対象とする事前の発掘調査を行うことになった。

本委員会は 1989 年 11 月に開催され、岡内三眞総合科学部助教授を調査担当者に任命し、埋蔵文化財の調査と研究報告を担当することになった。調査方針にかんする委員会決定の概要は、まず試掘調査を実施することによって建設予定地における埋蔵文化財の状態を把握し、その結果をふまえ、以後の本調査等必要な調査期間および予算措置を講ずるというものであった。また調査にあたっては、調査員等の必要な人員を臨時に確保することも併せて了承された。

地籍は徳島市庄町１丁目 78 番地の 1、調査面積は 143㎡であり、調査期間は 1990 年（平成２年）1 月 11 日から 2 月 28 日までである（図 50）。調査組織は下記のとおりである。

調査主体　　徳島大学（久保田晴寿学長）
調査担当者　岡内三眞（徳島大学総合科学部助教授）
調査員　　桑原久男（京都大学大学院博士課程学生）
調査補助員　深町真・福井由里香・王子典江
　　桑原千穂(以上徳島大学総合科学部学生)

(2)　薬学部実験研究棟建設予定地

また翌 1991 年（平成３年）には薬学部実験研究棟の建設が行われることになり、事前の埋蔵文化財調査が必要となった。先年度に実施された長井記念ホール建設地点での実績をふまえ、本件についても同様の措置がとられることとなり再度試掘調査に臨んだ。

調査面積は 12㎡であり、調査期間は 1991 年３月６日から３月28日までである（図50）。調査の主体および担当者は次のとおりである。

図 50　調査地の位置

調査主体　　徳島大学（武田克之学長）
調査担当者　岡内三眞（徳島大学総合科学部教授）

２　調査の目的

徳島大学蔵本地区（庄・蔵本遺跡）は、これまでに行われた徳島県教育委員会や徳島市教育委員会、徳島大学などの調査によって、庄遺跡の中心部分を構成すると考えられてきた。遺構としては、溝、流路、住居、墓等が検出され、縄文時代から近世にまでわたる長い時代の遺物が発掘されている。ただし今回の調査地点は、従来よりも鮎喰川や吉野川に近く標高もやや低いため、鮎喰川本流ないし主要な支流の氾濫原かその隣接地であると予想された。遺構が残っているとすれば、川や流路、溝など水に関連する遺構が多いと推定される。このため弥生時代から古墳時代にわたる水田や溝、古代から中世にかけての条里遺構、近世の水田が検出されうると予測した。

そこで今回の調査は各時代の遺構面を確認し、その調査によって各時代の生活、文化の実態を明らかにすることに主眼をおいた。特に縄文時代から弥生時代初めにかけての遺構を検出することを最初の目的とした。次に弥生時代に始まる水稲栽培の変遷を遺構によって現代まで跡づけ、土地利用の変化と技術の変遷との関係を捉えることを主目的とした。

なお長井記念ホールの建設予定地における調査の際には上記の目的が設定されたが、薬学部実験研究棟での試掘調査の際には前年度における調査結果の再確認という意味合いが強い。

３　調査経過

（1）　長井記念ホール建設予定地

発掘調査は、まずテストピットの試掘によって遺物の包含状況、遺構の確認を行い、その結果を踏まえたうえで全面的な発掘調査に切り替えることにした。調査は、駐車場跡地にテストピットを設け、撹乱層を重機の掘削によって除去し、以下は人力によって掘削し、試掘調査を行った。

１月11日、建設予定地の測量を行い、２ｍ方眼のグリッドを組んだ。この方眼グリッドを基準にして、市松状にテストピットを13箇所設定した。そして駐車場跡地の盛土、撹乱部分を重機によって排除し、現地表下約50㎝で近世の水田耕作土と思われる褐色土層を検出した。この土層以下を人力によって注意深く掘削したが、土師器片数点を散発的に検出したのみである。遺構の検出も困難であったため、更に現地表下2.5ｍまで慎重に掘り下げたが、遺物、遺構ともに検出できなかった。また下部の層序と遺物・遺構を確認するために、重機によって建設予定地東北隅のXIテストピット１箇所を約４ｍまで掘削したが、人工的なものを検出するには至らなかった。このため全面調査への切り替えは必要はないものと判断し、２月２日で発掘作業を終了した。翌２月３日からは図面、写真などの整理作業を行った。その後報告書作成のためトレースやレイアウトなどをおこない、３月30日にその作業を完了した。

（2）　薬学部実験研究棟建設予定地

前年度の試掘調査成果をふまえると、当該地区は遺構密度が希薄で遺跡の縁辺部にあたる可能性が濃厚であった。そのため、テストピットは３カ所に設定し、試掘調査を実施した。

調査は３月６日に開始したが、明確な遺構・遺物は検出されず、３月28日に全作業を終了した。

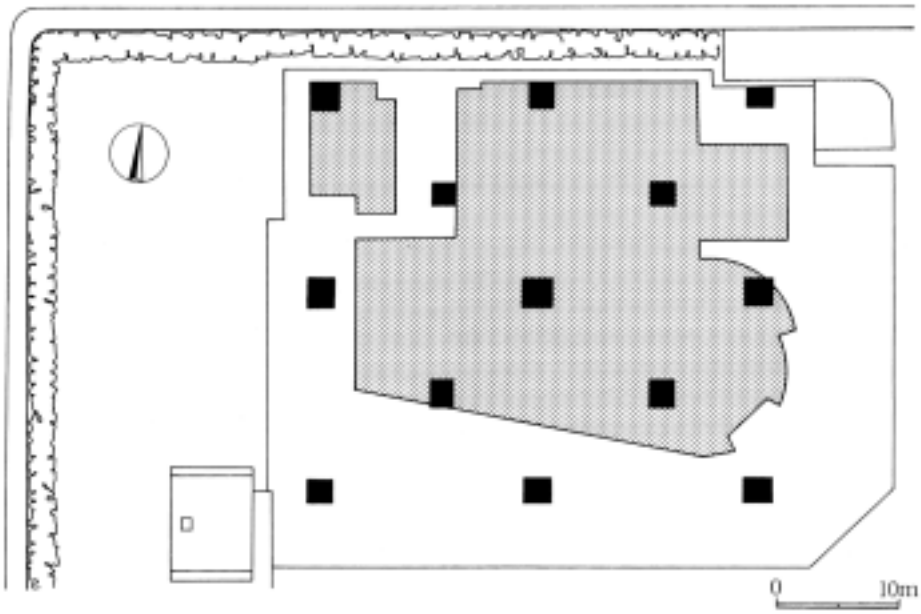


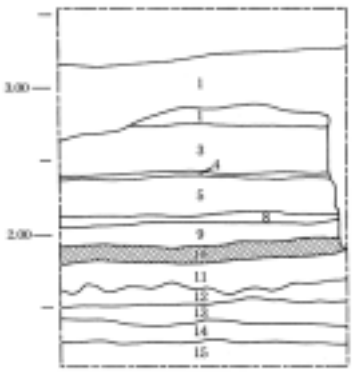
図 51　調査地の配置

第２節　調査の記録

本節では長井記念ホールにおける調査記録を２地点の代表として報告するにとどめ、薬学部実験研究棟での記録は省略する。

１　基本層序

基本層序は図 52 に示したとおりである。13 箇所の試掘坑の基本層序は上層部の撹乱層を除いてほとんど同じであり、第１層から 17 層に分けることができる。このうち遺物を含むことが確認できたのは第３層と第 10 層で、第３層（灰色粘質土層）は近世から明治期までの水田耕土と考えられる。また第 10 層（濃茶褐色粘質土層）は中世の耕作土であろうと推定される。なお第 17 層の青灰色砂質土層は、



庄 89'　長井記念ホール
1　盛土の撹乱層
　石灰がらやガラス瓶の破片、近代の陶磁器などが混じる
2　緑灰色粘質土層　上部は撹乱で破壊されている　遺物を含まない
3　灰色粘質土層　近世から明治までの水田耕作土　遺物を含まない
4　赤褐色マンガン層　赤褐色粒状の塊を含んでいる　水田の帯水層
5　灰褐色粘質土層　水田の耕作土
6　赤褐色マンガン層　４層と同じ
7　灰白色粘質土層
　粘性やや強　白味の強いブロックを斑状に含む　遺物を含まない
8　茶褐色粘質土層　遺物を含まない
9　黄白色粘質土層　粘性あり　遺物を含まない
10　濃茶褐色粘質土層　奈時期の細片を含む　中性の耕作土
11　茶褐色粘質土層　マンガン粒を含む　遺物を含まない
12　灰白色粘質土層　マンガン粒を含む　遺物を含まない
13　灰黒色粘土層　粘性強　遺物を含まない
14　黒色粘土層　非常に細かな有機物を含んでいる　粘性強
15　灰黒色粘土層　粘性有り　遺物を含まない
16　青灰色粘土層　粘性弱　川によって形成された自然堆積
17　青灰色砂質土層　細砂層

図 52　基本土層の状況

細かな砂の堆積で厚さは50㎝以上に達するが、下限は壁面崩落の恐れがあったために確認できなかった。河川堆積であろうが、堆積年代は不明である。

２　遺構と遺物

(1)　遺構

今回の調査では近世の水田耕土とみられる堆積層と中世頃に形成されたとおぼしき耕作土層等を検出したが、それ以外の遺構を検出することはできなかった。

(2)　遺物

遺物は灰色粘質土層と撹乱層中から近・現代の陶磁器類や素焼の火鉢などが出土したのと、濃茶褐色粘土層から土師器片が数点検出されただけである。土師器片は１×２㎝ほどの細片で単独に出土し、磨滅が著しく、本来の位置から遊離した状況を示している。

陶磁器類はほとんどが近代以降の製品で美濃焼の刻印のある高台付碗などが含まれる。ただし１点のみ上絵付けの製品が認められ、本例については近世に遡る可能性が指摘できる。

土師器片は第10層からの出土である。摩耗が顕著で形状や時期を判定しえない。細片のため図示も不可能である。

３　調査成果のまとめ

今回の調査においては、当初予想していた遺構面は検出されなかった。第10層でわずかに土師器の細片を見いだしたのみである。この土師器は細かな破片になって表面が摩滅しており、水流等によって運ばれてきたものと考えられる。また第11層以下での遺物の検出に努めたが、はじめに期待した縄文土器や弥生土器はついに検出することができなかった。このようにほとんど遺物を含まないことと遺構を検出できないことから判断して、この地点には我々の目と手作業によっては、もはや遺構や遺物を検出できないと判断した。おそらく鮎喰川の主流ないしは支流の氾濫原、またはそれに隣接する沖積地と考えてよかろう。しかし医学部同窓会館（青藍会館）地点では、弥生時代前期の墓地跡が発掘され、中央病院地区や南庄遺跡では弥生時代の住居跡が検出されている。眉山北麓の山よりに住居や墓が営まれるとすれば、水田は当然川よりの一帯に設けられたはずである。今回の調査地点では検出できなかったが、近い将来には水田跡を検出し、徳島における弥生時代水稲栽培の実態を明らかにすることができるだろう。